

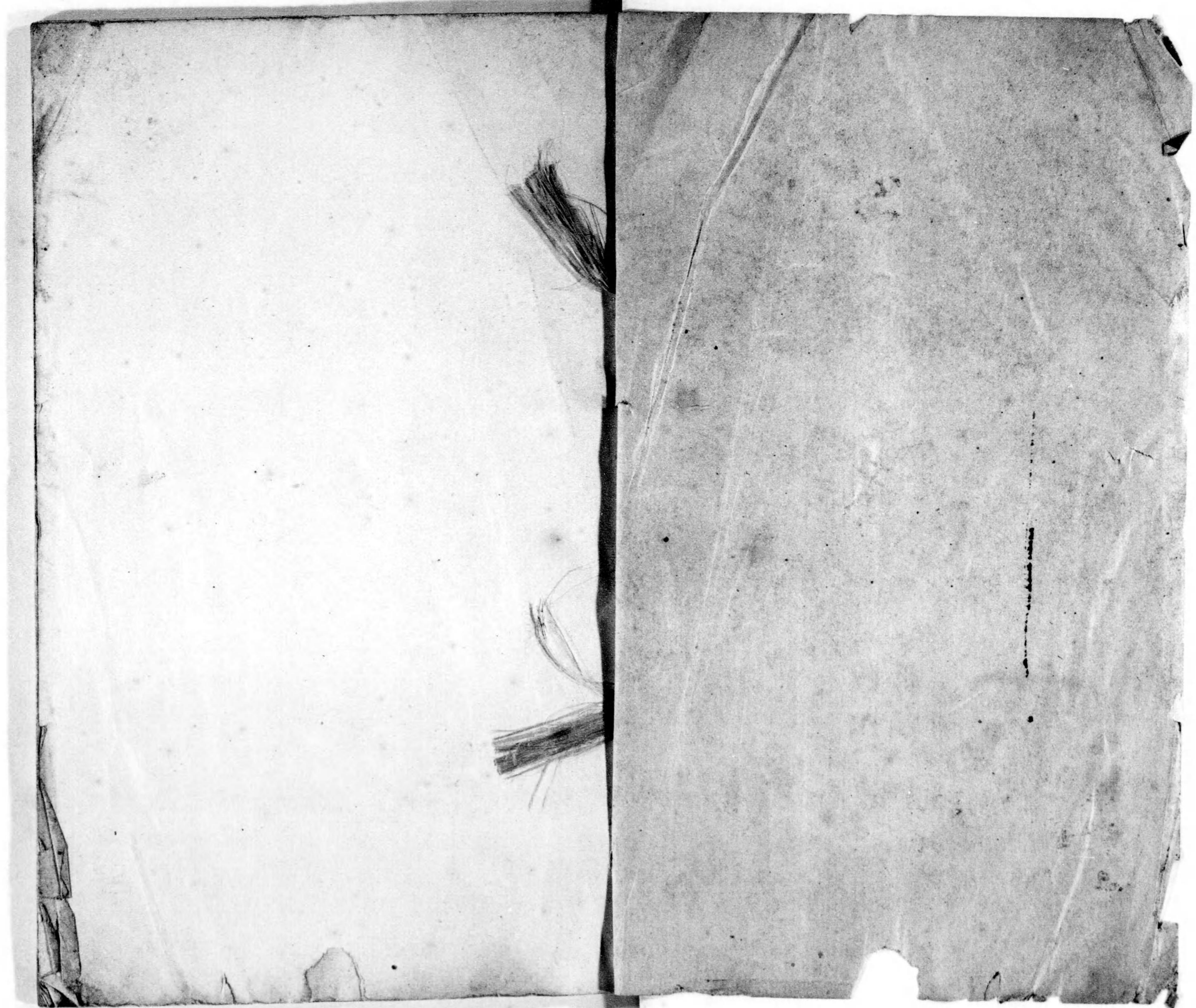
特102

654

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>18</sup> 11 12 13 14 15

始







特102  
654



武男

武

男

大正十年

[1921]



亡き父の御前に

著者

父ありと思へば輕ろ

し父の亡き後の勤め

のいと重きかな

勇猛院精阿自勵健行  
の居士と申すは我が  
父にこそ  
(2)

夏冬を通じて帽子頂  
かぞ寫眞も終生に排  
してやみぬ  
(3)



父 亡



日は暮れつ空また高  
し光遠し飛ぶ鳶ひと  
り降りむともせず

火も水も我れは恐れ  
ず直行かむ唯御力の  
御暗示のまゝに  
(6)

伏し拜む大地の今に  
打ち割れて地獄に墜  
つるも我れは恨みず  
(7)



男 武 者 著

太。陽は西へ水は低き  
に人は前へ真理の刃  
は時間の鞘に

(8)





名も知れぬ白き尾長の離れ蝶曇れる夜明を  
よろよると飛ぶ

2

花一輪眞黄色に咲いて岩の間より早く覺め  
よと小川のぞめり

橋の下白衣の翁佇めり何祈るらむ額に手し  
て

3

天地の廻轉をとめてこの夜明我れとこしへ  
にさまよはむかな

空の鳶

ひーひひひ ひろひろひろ と鳶は鳴く妻  
を戀ひてか友を戀ひてか

妻の戀友の戀なく鳶はひとり高き雲井の光  
求めて

空の鳶倦まず撓まずひねもすを雲井の光に  
あこがれさまよふ

日は暮れつ空また高し光遠し飛ぶ鳶ひとり  
降りむともせず

6

とこしへに地を這ひ迷ふ人の子等よ折に雲  
井の鳶にあやかれ

歸省

枝豆はまだ熟れずして眞桑瓜西瓜唐黍今盛  
りなり

7



ザンブリと我家の風呂に飛入りて桶一パイ  
に力味ぬるかな

ひぐらしの聲を聞きつゝもつて双手もてうなじ洗  
へば赤き花咲く

おぢさんと寄て集る姪甥に何やらむかなど  
我れ大人おとな振る

嗚呼ペロ(愛犬の名)や汝なれも老ひたりな十四歳  
我れ亦遂に三十みそぢ餘りに

ヒトヒトと闇に一聲吸はれ行くねやまどひ  
たる哀れな小雛

物干ものばしの間に残れる白浴衣襟かはかずに我が  
母待てり

幼手にトテモ重かりし藏の戸前とまへ今易々やすと押  
され行くかな

箒毎に土の香氣かきのそゝり立つ霧の深める真

夏の朝風

雛鳥の水を飲みては空仰ぐ態かたち悉く可愛くも  
あるかな

米桶にとまる雛鳥ありったけ首を伸ばして  
盗み食ふなる

青田に立ち天覧の馬の噂より天子様の有り  
がたきなど語る

腹を摩す許りに青田掠め飛ぶ燕宙返りして  
は行きつ戻りつ

水力の電氣の柱打ち貫<sup>ぬ</sup>きさて青田の眺<sup>なが</sup>いとも  
惱める

14

鳥共もストライキしてか電柱に群れ集りて  
しきりにさゝやく

大籠に山なす草を負ひしきり徑<sup>こみち</sup>來るものは  
我が友の子等

15

魚釣れる子供の姿親みて我れ亦魚を釣りた  
さ心地す

三歳の鯰の頭あたまに踏み乗りて望外ぼうげの獲物せし  
なるとさく

## 汽 車

潮の如く先争ひし乗客も別れ惜みては下車  
して行きぬ

ステッキに仕込める細巻洋傘を人憚からず  
擴ぐる田紳

一筋の軌道たどりて何處いづれに行くコトン／＼  
と貨物列車は

人轢殺おきしこともあるべき此のレール今日  
は光りて堇花咲く

ペールかけし灰殻婦人の振向くを我れ待つ  
程に汽車は動きぬ

紫の袷紗に包まれし夏蜜柑しやぶり捨てら  
れてあられなき姫に

20

憎くそらに痛々しげに汽笛する夜行の汽車  
は人など蝶殺かむか

### 光は東より

(大正八年一月  
榮報新年の辭)

顧みれば歲月矢の如く流れて早や五星霜杜  
鵲一聲啼いて雲間に仄の見ゆるの頃偶々年  
少氣銳のセルビヤの一青年其の指頭を短銃  
の引金に觸るゝや指端寸餘の小運動は忽ち  
恐るべき導火線と化し果進急速度に發展し

21

歐洲の天地を中心として此に全世界に亘る  
驚天動地の暗濤たる一大旋風を誘起す之れ  
が渦中に投せらるゝ約三十國人類の死傷一  
千二百萬餘戰費三千億餘圓の巨額に上り而  
して其の他有形無形の損害に至りては實に  
無量擧ぐべからず之れ寔に未曾有の一大慘  
劇にして近來漸く進化發達し來りしてふ所

謂靈長たる人類も尙未だ大いに省み大いに  
學ぶべきの缺陷あるを遺憾なく曝露し畢は  
むぬ

腕力的征服固より偉なりされど征服の偉な  
るも文化の偉にして大なるに如かず蓋世の  
英雄ケイザルの偉なるも其のゴールを征服  
したるが爲にあらざして其の征服の副産物



としてローマの文化をゴールに移植したるにあり而して征服の偉なるは刹那的にして決して永遠にはあらず且つ其の刹那的の偉なるも文化を背景としたる場合に於てのみ唯偉なり若し夫れ文化の背景なき征服の如きに至りては刹那的の偉すら有せず單に之れ人類共同の惨害のみ而して後世永久的批

評家の眼には獨り文化の偉大なるのみ映ず」文化とは人類をして動物性を排脱し人類の資性を向上せしめ以て人類に永久の平和と幸福とを與ふるものを云ふ文化は光なり文化は眞理なり光は必ず發し眞理は必ず現はる如何なる力も眞理をして永遠に之れを葬り去る能はず唯眞理の及は徐ろに時間の鞘

に匿るゝのみ一度時間の鞘を拂へば眞理の  
刃は秋水皎々として此に滴る觸るれば百鍊  
の鐵をも斷ち衝けば百萬の金城をも壞つべ  
し偉なるかな光眞理而して文化の力よ  
エジプト、ユダヤ、ギリシヤ、ローマ、サラセンの  
文化印度支那の文化延いては近代歐米の文  
化何れも相牽連して現代に發達し來る吾人

は其の偉なるを認む然れども以上の諸文明  
は何れも過渡時代にあり唯將來一の燦然た  
る結論的文化を前提と爲し此に發達し來る  
のみ然らば結論は何處に之れを求むべき惟  
ふに日は東より登らざるべからず光は東よ  
り發せざるべからず將來文化の中心は日の  
本の國正に我皇國ならざるべからず結論的

文化の光は獨り日東帝國に於て其の發達を  
見るの運命を有す

神祖天照皇光明の御體として高天ヶ原に君  
臨せられ人皇神武帝大和建國の時金鵝亦光  
明を放つ茲に紀元二千五百七十有餘年一系  
の聖天子世々相君臨し皇猷六合を兼ね而し  
て皇威八紘に耀く惟ふに建國草創の初より

既に如斯光明を以て象徴さる即ち吾は光の  
國なり光の民族なり吾人は此に平和第一の  
新年を迎ふるに當り其の光の皇國に其の生  
を享けたることを深く謝し而して謹むて寶  
祚の彌榮えに榮えむことを祈る

ぬば玉の吹雪の暗は打ち霽れてのぼる旭は  
東よりかも

30

千早振神の皇國は彌榮え千代に八千代に天  
壤のごと

皇國人夢な忘れそ日は東豊さか登る日の本  
の國(以上)

31

東雲の天地のごと明らかにすべ治めませ代  
々木野の神

丹塗の塔

若草の土堤上歩むたをやめのバラソル姿い  
とも艶なる

吊橋を勇みて渡る若駒の赤き毛布に山の春  
來る

水温るみ杉の黒める赤坂の濠のあたりや鷗  
らの飛ぶ

ペールかけしレディを乗せて青塗の自働車  
は行けり花の隧道を

南風なんふうに小蝶せうてつの如き街路樹げいろうじゆの若芽わがや揺るげば四  
體たいはだるし

蒸し暑き汽車の窓明け青麥の上吹く風に顔  
を撫てらる

五月雨に心も室むろも曇れるに掛けたる刀たうの背  
のみ光りて

市ヶ谷の濠の上水淀めるに岸行く自働車の  
姿は忙はし

夏木立ポツリと落ちし黄色なる小虫惜まれ  
て後退をする

魔の如く夏の夜の池ひらめきて車窓に迷へ  
る我れに迫りぬ

竹の葉の朽ちるにほひに雫落ち佇む藪は静  
もりにけり

夕立の雲切る、間より陽の射して黄楊の苺  
芽に白き蝶飛ぶ

何も居ぬと思ひ定めたる溝水にフハリと浮  
きて蛙大氣を吸ふ

顔洗ふ井戸のながしの敷石にゆたかに伏せ  
る桐の一葉も

秋水の心地よく泌む手洗に洗ふともなく三  
度手洗ふ



木の精のかをりも高き白木門よべの秋雨に  
打たれて濡るゝ

名も知れぬ赤き一葉の水に落ち裏返へして  
は渦巻かれ行く

行儀よく幹ならびたる赤松の林に秋の夕日  
の射るかな

心眼も覺むるばかりのあざやかに壁の黄菊  
は電燈に映えぬ

柚の湯の歸へりに重きガラス戸を半かば明  
くれば月屋根に凍る

42

緑青瓦丹塗の塔のそゝり立つ上野のあたり  
や裸木は明かるし

挨 拶

肅啓夢の間に櫻も散り早や世は目に青葉の  
候と相變り參り候處皆々様には愈よ御健祥  
にあらせられ大慶此事に御座候儲て先日拙  
女清香子死去の際は深く御心にかけてせら  
れ御多忙中にも拘はらず早速御鄭重なる御

43

弔詞など賜はり色々御高配を辱うしまことに謝するに言葉もなく唯々感謝の極に御座候

三月中拙老父病氣看護の爲め同伴歸省仕り居り候處氣候風土の急變せし爲乎約一週間程肺炎症に冒され候へ共さすがに拙な親心とてよもや斯く相成るものとは夢にも思ひ

設けぬ折突如四月十七日遂にむざ／＼黄泉の世へと奪はれしものから生死は人の世の常とは辨ふるものゝなほ心残りも亦なかなかに多く烏辭がましくも折角丹精の鉢植の牡丹の蕾のあたり一陣の狂風の爲め無慘にも打ち落されたる刹那の夫れの如くにて御座候唯故山に於て茶毘に附すことを得たる

のみはせめてもの心の慰にて御座候

去月廿八日夜單身歸京城早速拜趨篤と御禮  
申上ぐ可き筈の處取込中に付乍略儀先は書  
面を以て御禮申上げ度如斯御座候 敬具

46

咲きて後散るも惜まる世の中に花咲かずし  
て落ちし蕾は (大正八年五月)

### 清香子

父危篤早くかへれの急電に周章<sup>あわて</sup>狼狽<sup>よた</sup>き故郷<sup>こきやう</sup>

47

の空へ

孤々の聲半歳ならぬ清香子は汽車よ汽船よ  
と千二百哩を

父は快したといとけなき清香子は旅の疲れ  
にあはれや病めり

歸<sup>か</sup>鮮<sup>へ</sup>る日は明日<sup>あす</sup>に迫れどいとし子は今日も  
よからずなほも惱める

友戀ひし我が子も戀ひし身は一つ我が友ゆ  
るせよ我子可愛ゆし

我が友は暴動の惱みに寢食を忘れ戦ひ我れ  
をば待たむ

清香ちゃんよ明日は歸鮮ると我れ呼べば奇  
しき臉まぶたをやゝにうごめかす

神ならぬ人は我が子のしばしして死するも  
知らず我が家やをば出づ

けたゝまし誰れか来てよと叫びつゝ半狂亂  
の我が妻の姿

醫者は來ず我が清香子はこときるゝ一刻千  
秋醫者は世になさか

生命奪る罪の宣告を待つ如く心ちのゝぎ診  
斷をば待つ

寂として二階に聲なし音もなし階段のぼる  
力我れなし

人の來る氣はひ恐ろしあな恐ろし何を告ぐ  
らむ其の言の葉に

氣の毒の人の言葉に清香子はつひにあはれ  
や亡き數に入る

弱き者よ女てふ名も今日こそは父たる我に  
ひた準用ゐらる

鷄林の羽叩

十年目蝨ばず啼かずに羽叩きす庭つ鳥こそ  
あな恐ろしや



羽叩きになどかおどろく賢さかき人よ庭つ鳥と  
て翼あるものを

泰山を挟み北海超ゆるとも鳥の翼はいかで  
得抜かむ

縦したとひ鳥の翼は得抜くとも角矯めらる  
る牛の譬を

翼伸ばし羽叩きさすか翼抜き鳥を殺すか鶏とり  
飼かひの人よ

朝鮮の友人へ

謹啓南山の秋色如何に御座候哉賢臺益御健  
祥の御事と奉推察候借て先日は結構なる紀  
念品の御惠賜に預り千萬辱なく御厚情の程  
は永く傳家の重寶として之れを拜賞仕るべ

く此に謹むて奉鳴謝候  
願れば「マサヲキトクインギカヘレ」の急電に  
心も膽も全く奪はれ冥想四ヶ年のいとしき  
老人亭のホームをも槿花一朝の夢も愚かに  
之れを解消し南大門驛頭電燈の光なほ淡き  
の裡多年我が敬愛せる諸賢臺に御別れ申し  
候より光陰早や九旬を相過ごし聊か感慨無

量のもの有之候まことや生は不斷の流轉の  
譬へ一切の改革亦當然進み行くべき人の道  
にて結構至極には無之相違御座候へ共唯半  
島十年の創業的治蹟に努力少からざる我が  
敬愛せる諸賢臺の何時の間にか次第次第に  
雲烟四散するは亦何となく無情の感有之候  
時節柄偏に御自愛專一に相願ひ度く先は御

伺旁御禮迄如斯御座候 敬具

無情なり流轉なるかも進化なり神に捧げし

木の葉は散りぬ (大正八年秋)

真理の及

(田家の早梅に因みて民衆運動を)

曉の鐘の響に賤が家は未だ眠れるに早梅の

咲く

けたゝましあな喧びすしあな五月蠅さし我  
熟睡して自覺むるものを

扱てや戸を明くれば人はそもいかに顔も洗

はず眼脂鼻糞

齒を鳴らし肩を噴らし瘞撃し新らしきなど  
と禽獸の争闘す

太陽は西へ水は低きに人は前へ真理の及は  
時間の鞘に

黒

鳩

(某筆禍問題)

北國の森に棲てふ黒鳩の鳴く音を真似て銃  
砲向けらるゝ

銃口を轉へせ山守我はたゞ物の哀れを奏つ  
るの伶人

大鵬の空往くごとく我伶人輩は心適く儘森  
羅萬象を奏づ

新見世の鳥屋の親方ヨタ飛ばし鳩も大鵬の  
類など云ふ

鹿を馬と堅白異同辯めたる大臣あり鳩も或  
は大鵬なるかも

颯風らし異國鳥も漂浪はむ心して聽け妙なる音色を

黒光る翼はあれど鳩は鳩鼻にあらずたゞ音の凄ごし

銃口は鳩を目的はす森に棲み其の森呪ふ鳩の音山彦

云云と人は云へども現世の森の主じは山守なりけり

大鵬たかの空翔かけるごと森の主かじは心の儘ままに銃砲じゆう  
をば向けむ

## 青松寺

石段いしだんをのぼりて行けば青松寺君はいづこの  
墓かぶにいまさむ



まのあたり小松の墓石の凛々しきは訪ぬる  
君のおくつきにか

線香は燃えず残れり我れ慕ふ君の御靈はま  
だ世にいますや

總督の其の名いかめし大將の其の名も深く  
また新らし

花手向け額づくなかに焼香の煙は墓石に吸  
はれて消ゆる

裸木の曇れる空に鳥一つつひに來らず枝も  
揺がず

あくつきの常は寂しきものなるに君訪ふ今

日の心の雄々しよ

## 動物園

細き眼を斜めにまげて小供らに御煎餅ねだ  
る象は可愛ゆし

人氣ある猿の周圍まはりは人多し人も獸も愛嬌は  
よきか

鼻の穴ひらき鳴らして猪ちまの如く憤りたる昔  
の我れかな

眠りたる獅子の譬へを前に見る心恐ろし薄  
氣味わろし

不真面目の今日此の頃の都人此の虎放ちて  
驚かさばやな

人誑す智慧もて人に捕はるゝ檻の狐の浅ま  
しきかな

蝙蝠の如く天井にぶら下がり  
のんきに一日  
暮して見てむ

眠りたる如くになほも細目あけ真晝の中に  
居ゐ睡むる狸

餓えたるは豺狼の如しと人はいふ如何なる  
時ぞ汝なれは肥るか

右に行き左に戻りては日を暮らす熊の生活  
は此の頃の我れ

河馬の顔見てフト思ひぬ我が友の不恰好に  
て愛嬌ありし男を

網の中に孔雀は氣取り網の外に女優の如き  
女は澄ませり

片足かたあしに取り澄ましたる白鷺の飛立つ姿はま  
ことにさやしやなり

絢爛けんらんの五色ごしきの衣身ころもに纏まとふいんこう鳥とりは誰たれれ  
のあこがれ

體裁ていさいのよきボンネットボンネットにコバルトコバルトの洋装ようさうし  
たるは冠鳩かむりばととか

比翼ひよくして檻かごに捕とらはる鴛鴦うんおうは翼つばきよごれて勢揚せいはや  
らず

人麿ひとまろが夢ゆめにも見みたる山鳥やまどりの尾おしにもまされる  
尾長鳥おしながどりかな

ステツキの握りの如く鼻を曲げ檻よりなら  
む鷺の眼は鋭し

悠々と迫らずとちゅう鯨掬ひたる丹頂の鶴は神の使  
なりと

無遠慮に鳴きては無遠慮に振舞へる鷺鳥の  
産地は米國なりとか

溝とほの蛙

緋縮緬の細紐かけて首縊る虚榮の女の最後

やあはれ

美人にはあれど少しく間伸まのびたる顔の所有  
者は圍女かこひめなりし

濃艶の化粧なしたる若後家の髪のにほひは  
鼻襲はなひ來る



臨床にかけては心元なきもたゞ若き醫の味  
方したさに

ながくと足伸ばしたる蛙かな溝とよの臭味くさみも  
我不關焉に

時折は抜きて油も指して見む筐底深き傳家  
の寶刀よ

附つけ上あがる者と少しく無遠慮に我れも振舞へ  
ば遠慮せる人

一鴻千里秋の大野を飛ぶ雁も時折病みては  
翼休むる

金襴の衣かけたる黄金蠅など人の世に斯く  
も忌まるゝ

千圓の割増欲しさに債券買ふ人の集への慌  
しくもあるかな

昇給の辭令を受けて感謝せるサラリーマン  
の腕の細さよ

晝暗き杉の並木に白き手の君のダイヤはい  
と光りけり

想夫戀調ぶる君の白魚しらうまの如き指にも糸蛸いとだこや  
ある

鶏の卵の殻からの履まれしが如くに破れぬうら  
若き戀は

金雀花

金雀花の咲きほこりたるを見るにつけ古る

家など存在りしかと思へり

春水を吸ひて田の土黒黒と畦青青と蛙は鳴

きぬ

レストランの電燈明かるき磨硝子灰殻男の

女に戯むる

道はぬかり空黒黒と街燈黄ばみ仁丹の廣告  
ひとり赤赤

緑葉キナンドは何れが濃さと眺めたる夕の窓に桐の  
花散る

捻ぢりたる手洗水の出ぬ如く逢ふ度毎に思  
ひする友

蛸あひびの如く腕巻き延ばし鮫鱈あんこつの如くに口開き  
欠伸あひびする朝

大だいの字じに手て古こ摺ずらしたる醉よひ人どれも自じ働どう車しゃ來らいに  
は慌わがてゝ起おきぬ

古ふるるびたる洋やう傘さんにつかまり母はは人びとをうしろに

慕ぞふ幼こ子なごは可愛かわゆし

草くさは伸のび木きの葉ははみどり苗こゝろ代しろに種たねは蒔まかれ  
て爲なすなき我われは

わざくと我われが乗のる傍わきに唾つばを吐つく人ひとの眉まゆ毛げ  
は毛け蟲むしの如ごとし

麥の穂の一つ圖抜けて伸びたるはかたちよ  
からず逸品なりとも

いらつしやいと氣合かけらるさまりわるさ  
に慌てゝ通りぬ掛茶屋の前を

紙礫かみつぶ顔に打たせて驚かすなほも眼つむる大だい  
佛ぶつは偉えいらし

暗示

無力無智無識の我れは祈るなり無限無窮の  
御力みちからの前に

塞翁の馬のたづなはたゞひとり我が御力みちからの  
御手みてにまつはる

四苦八苦悶えうめけど人の子は遂にのがれ  
ず此の掟おきてより



よしたとひいかに悪しくも御力の皆我がた  
めに定めらるゝかな

善きと云ひ悪しきと云ふも皆人のはかなき  
智慧の錯覺よりして

伏し拜がむ大地の今に打ち割れて地獄に墜  
つるも我は恨みず

火も水も我は恐れず直行かむ唯御力の御暗  
示のまゝに

亡き父

勇猛院精阿自勵健行の居士と申すは我が父  
にこそ

泰然自若所信を貫き進みたる我が父上は意  
思の權化か

夏冬を通じて帽子頂かず寫眞も終生に排し  
てやみぬ

岩が根に咲く百合あれど父上の堅き意思に  
も子の愛や満てり

身を飾る人の多きに我が父は己れを捨て、  
たゞ子等を教育めり

時折は刃の如き鋭さに子等を叱るもまた子  
等に詫びぬ

己れなき後をクヨク遺言する人あるなか  
に我が父は淡泊し

我れはたゞ生せいの世界せかいに教育けいよくめり我れ亡なきあ  
とは汝なれの自由じゆうよと

110

母上ははも汝なが兄弟けいだい姉妹せまいも我われが財産ざいさんも皆みな汝なが肩かた  
に我れ遺なさむと

父ありと思へば輕かろろし父の亡なき後の勤こめの  
いと重おもきかな（終）

111

大正十年五月二十七日印刷  
大正十年五月三十一日發行

非賣品

著者 藤 沼 武 男

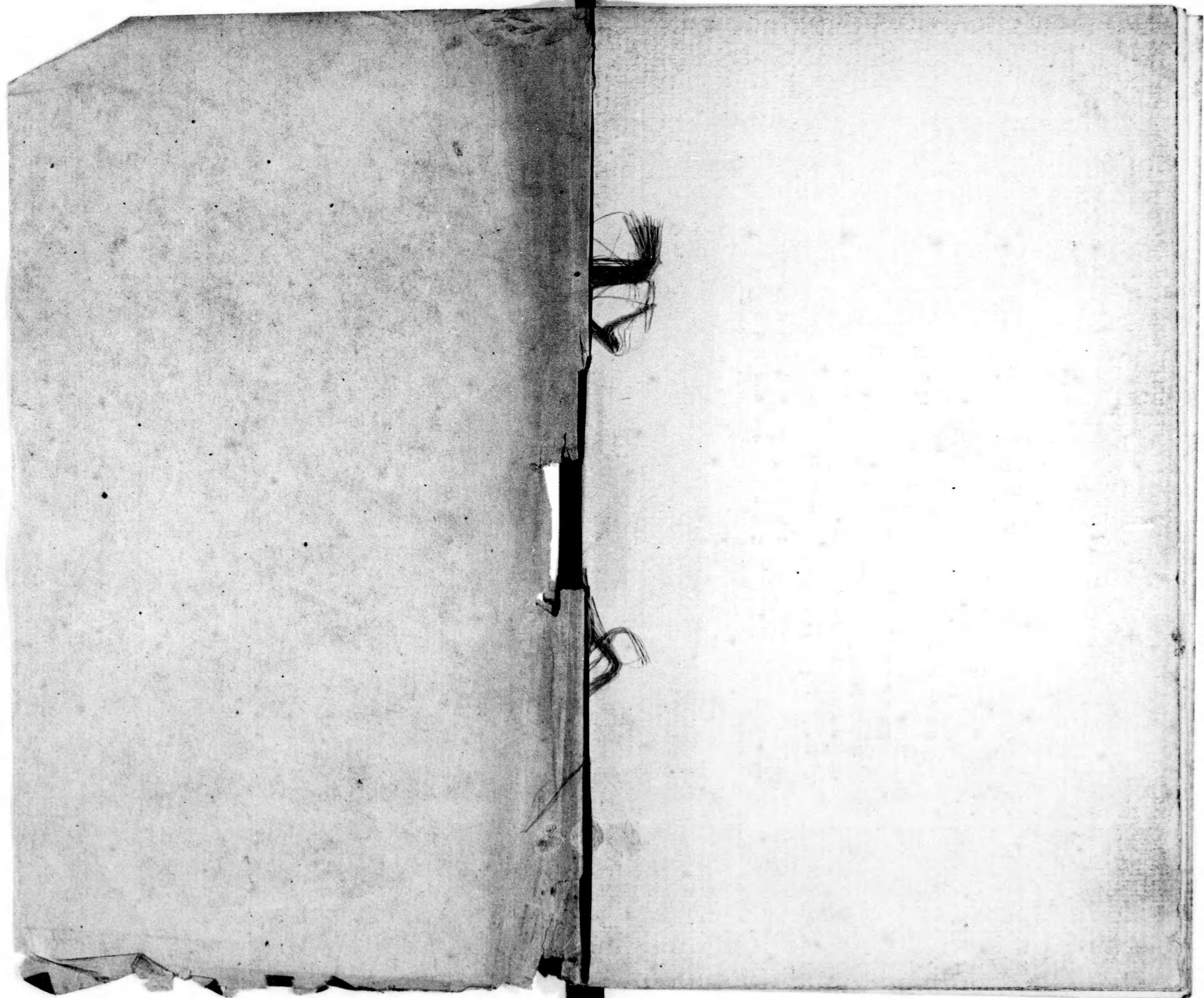
發行者 藤 沼 武 男  
東京市小石川區表町六十三番地

印刷所 万月堂印刷所  
東京市四谷區尾張町五番地

發行所 藤 沼 武 男  
東京市小石川區表町六十三番地

不許  
複製

電話小石川九九〇番



終

